

# 小児在宅ケア研究会会報

第 15 号 2021 年 3 月 12 日

小児在宅ケア研究会 <http://hc-cf.jp/>

## ご挨拶

大学に向かう道すがら、鳥の鳴き声に春を感じるようになりました。会員の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

この一年間を振り返ると、COVID-19 の感染拡大により、私達の生活は大きく変わりました。命と向き合いながら医療が途絶えないように力を注がれた方、教育のあり方に悩み、模索し続けた方など、会員の皆様にはそれぞれの体験があったことと思います。刻々と変化する状況の中で、時に価値観までも揺さぶられる感覚がありましたが、同時に、どのような状況にあっても本質的なことは変わらないことも実感いたしました。改めて、人と人が繋がることの大切さや、医療や教育の使命の大きさに気づかされる一年でもありました。

小児在宅ケア研究会では、約一年前に第 17 期小児在宅ケアコーディネーター研修会を休止することを決定いたしました。これまで 16 年間途切れることなく継続してきた研修会でしたが、運営委員をはじめとする研修会を支えてくださる関係者が本務に専念できること、そして感染拡大を最小限に止めることを優先した結果でした。当時は COVID-19 の実態やこの先起こること、すべきことが“見えない”中での判断でもありました。研修会への参加をご予定いただいた方々には、大変ご迷惑をおかけいたしました。本研究会では、これに伴う会費の措置を検討いたしましたので、詳しくは総会資料をご参照ください。

これらの経験を糧に、2021 年度は研修会を再開することを前提として準備を始めております。単に事業を継続することにとどまらず、体験したことをお互いに振り返り、共有することを通して、看護において、そして人として大切なことは何かを、会員の皆様と確認し合う一年にしたいと考えています。引き続き、本研究会へのご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

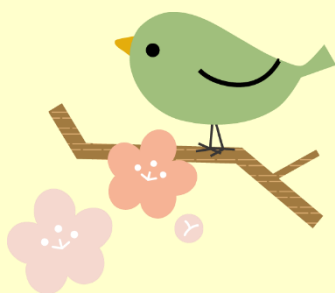
最後になりましたが、会員の皆様の益々のご健康とご多幸をお祈りいたします。

2021 年 3 月吉日

小児在宅ケア研究会 会長 奈良間美保

### この号の内容

- 1 ご挨拶
- 2 2020 年度の活動概要
- 3 2020 年度の体験
- 4 編集後記



## 2020 年度の活動概要

京都橘大学 堀妙子

2019 年度より活動の拠点を京都に移し、2020 年度も引き続き京都で年次集会・研修会を開催する予定で準備を進めていましたが、予想もしなかった COVID-19 の拡大により、3 月には予定していた年次集会・研修会を中止することを決定しました。

その後、活動をどのように進めていくのかについて検討をする必要がありましたが、小児在宅ケア研究会の運営委員の本務にも COVID-19 の影響が大きく及び、それぞれが様々な対応に追われる 1 年となりました。そのため、運営委員会の開催時期も大幅に遅くなり、総会のご連絡も遅くなってしまいました。

小児在宅ケア研究会の運営委員には、臨床の場で看護を実践している委員と、教育の場で学生教育に従事している委員がいますが、それぞれの立場でお子さんやご家族にとって、また学生にとって最善は何かを考えながらこの 1 年を過ごしてきました。今回の会報では、運営委員がこの 1 年間に公私にわたって体験してきたことを、少し紹介させていただきたいと思います。

私は学生教育に携わっておりますが、COVID-19 による影響は 2020 年 3 月の卒業式の中止から始まったように思います。4 月になると入学式も中止となり、あわせて前期の対面授業中止の決定がされました。しかし授業は予定通り開始するように求められ、既に使用していた資料提供と課題提出システムを使い授業が開始となりました。5 月になると本格的なオンライン授業が開始となり、大人数の授業はチャットを使用しながら LIVE 形式で授業を行い、少人数の授業はカメラをオンにしてグループワークなども実施しました。演習科目も様々な工夫をしてオンラインで進めました。また実習は中止となったものも多く、学内でのシミュレーション実習を行いました。後期になると対面授業も再開となり、人数制限をしながら学内演習をすることができるようになり、何とか 1 年を終えることができました。

初めての事ばかりで、私たちも学生も混乱する中この 1 年を過ごしてきましたが、制限された環境の中での学習で、学生は大学に来て学ぶことの楽しさや、人と直接コミュニケーションをとることの大切さを強く感じたようです。私たちも学生の頑張りに驚くと共に、学生には看護の素晴らしさを感じて欲しいと改めて感じました。

私の個人的な事では、週末の出張が無くなったこと、前期は学食がお休みになったこともあり料理をする機会が増えたことが大きな変化です。

今後は急速に発達した ICT など活用し、来るべき society5.0 にむけ、活動を進めていきたいと思っています（ちょっと大げさかもしれませんが）。

今後ともどうぞよろしくお願い致します。



オンラインで沐浴の練習をしている場面です。ぬいぐるみなどを活用して実施しました。



後期は学内にあるものを利用して、シミュレーション実習を行いました。



## 2020 年度の体験



## 『地域みんなで支えています』

伊東市民病院 上原章江

今年度は COVID-19 の流行で、入学早々に学校が休校になってしまった、利用している施設にクラスターが発生したなど、私の地域でも医療的ケアを必要とする子どもたちの生活に大きな影響がありました。ケース会議は次々と中止になり、小さな地域だからこそ、いつでもみんなで顔を合わせて相談していたことが容易ではなくなりました。しかし、お互いを良く知っている関係性だったからこそ、「あそこ、きっと大変だね。うちは今これができるね。」と、お互いを思いやり、子どもたちのことを考えて、通常にはない支援を考え出して協力してくれる方たちがいました。慣れない Web 会議で顔を合わせても十分に近況を報告しあう余裕はありませんが、Web 上でも、すれ違った偶然の機会でも、出会えるその時々を大切にして、子どもたちの生活だけでなく自分たちも大事にしながらがんばっていきたいと思っています。一日でも早く、みんなで顔を合わせて笑ったり泣いたりできますように！



## 『子どもを支える人の大切さ～ボランティアの大切さ～』

大阪母子医療センター 川口めぐみ

受診・入院する子ども・家族は病院に勤務するスタッフだけではなく、様々な業者、各種団体、そして、ボランティアに支えられています。そのことをコロナ禍という中で改めて感じた 1 年でした。私は 2016 年からドッグセラピーの導入に携わりました。2020 年度は入院している子どもだけではなく、そのきょうだいにも対象を広げようとしていたところに COVID-19 感染拡大がありました。この活動において、ボランティアは大事なチームの一員であり、子どもの誘導、会場設営、病棟との連絡調整などを OG の素敵なおじ様二人を中心に担ってもらっていました。今はボランティアの病棟に出入りする活動は制限されており、セラピードッグに来てもらうこともできません。しかし、何らかの形で入院している子どもに笑顔を届ける活動を継続したいと思い、試行錯誤を繰り返しながらオンラインでのドッグセラピーを 12 月から開始しました。また、以前のようにボランティアの方とともに活動できる日を信じて、今はスタッフだけで奮闘しているところです。



## 『2020 年度後期からの体験』

愛知医科大学 大須賀美智

大学が後期に入ると、小児看護学の授業が始まりました。授業は遠隔でも、演習などは対面が可能になり、また通学時に混雑を避けるため、授業は各コマ 10 分短縮で行いました。しかし、当初対面で予定していた演習が、感染者が出たため前日に中止となるなど、急遽変更が必要になることが多くありました。Zoom で講義を進めていたので、試験はどうなのかと心配していたところ、例年と比べて成績は全体的にまずまずで、皆それぞれがんばっていたのだなあと感じたところです。そのような中で、学期末に課題が進められない・提出できない学生が出てきました。これまでは、顔を突き合わせる中で、他の学生の進み具合を見たり、互いに相談したりしていたのに、オンラインではそれが難しく、何気ないちょっとした関わりの中に、学びの機会があったことを痛感させられました。新しい方法の中で、苦手な人が取り残されないようにするにはどうしたらよいか、考え中です。



## 『からだ・・・』

名古屋大学大学院 新家一輝

早々にいわゆるコロナ太りをし、気付いたら 6 キロ前後、、まずい、。とっていたのですが、皆様にお気づきいただく前に元に戻りましたことを、ここに勝手にご報告いたします。身動きが取れないストレスを発散するために、これまでより少し遠回りをして、自転車で帰宅するようにしたことがよかったです。

昨年 2 月 27 日、全国小中高の一斉休校が要請されたことを知った時のショックで落ち込んだ気持ちが忘れられず、今も思い出してため息をついたりしています。そしてため息については、こころのなかで「さてっ」と、少し目を開けて、自分にできることを考え想像したり、ちょっと行動してみたりして、それが自分を励ますことにもなっているようです。

これまで出入りしていた医療機関や施設に簡単に入ることができず、またボランティアでも直接お子さんご家族に会えないのは寂しい日々ですが、最近は、ネットで普段会えないお子さんご家族、同僚の皆様とも会える機会が増えてきて、その時間が励みになっています。それでもやっぱり実際に会いたいです。

総じてフィジカルが大事だと実感している近頃です。

## 編集後記

会報第 15 号は、2020 年度の体験を皆様と共有できたらと思い構成を変えています。読んでいただき少しでも思いを共有していただけたら幸いです。2021 年度の活動につきましては、詳細が決まり次第皆様にお知らせいたしますので、しばらくお待ちください。

また、年度末に連絡先が変更となる予定の方、恐れ入りますが、下記の小児在宅ケア研究会事務局までお知らせください。ご協力のほどどうぞよろしくお願い致します。

小児在宅ケア研究会事務局（京都橘大学看護学部：担当 定森・伊藤・堀）

E-mail chc@tachibana-u.ac.jp FAX 075-574-4266

